

モダン着物の流行と着装・作法の変容
—服飾博物館収蔵品の事例を中心に—
Modernization of Kimono and its Wearing Manners from 1910s to 1930s in Japan
—Focusing on the Bunka Gakuen Costume Museum's Collections

山田 晃子*1⁺, 小山 有子*2⁺, 半田 幸子*3⁺
Akiko Yamada*1⁺, Yuko Koyama*2⁺, Sachiko Handa*3⁺

*1 大阪大学大学院文学研究科 大阪府豊中市待兼山町 1-5

Graduate School of Letters, Osaka University,
1-5 Machikaneyama-cho, Toyonaka, Osaka, Japan

*2 大阪大学日本語日本文化教育センター
Center for Japanese Language and Culture, Osaka University

*3 東北大学大学院国際文化研究科
Graduate School of International Cultural Studies, Tohoku University
⁺服飾文化共同研究拠点、文化ファッション研究機構、文化学園大学
Joint Research Center for Fashion and Clothing Culture
Bunka Fashion Research Institute, Bunka Gakuen University

Abstract: In pre-war Japan kimonos with modernized patterns were in fashion. It is obvious that these motifs, such as roses or geometrical figures, were influenced by Western designs. We want to clarify the development of this “fever” for kimono with modernized patterns by investigating the articles in the Japanese women’s magazines and stored items in the museums in Japan. This fiscal year we investigated the following points: 1) modernized ways to wear kimono in women’s magazines 2) one of the largest department stores in Japan, Mitsukoshi’s promotional strategy for kimono with modernized patterns 3) collection of kimonos with modernized patterns in Bunka Gakuen Costume Museum. These points help us understand one important aspect of the modernization of kimonos.

1. 研究の狙い

ファッションにおける「モダン」研究は、これまで洋装の受容に焦点が絞られがちであったが、本研究では着物における「モダン」化を重視する。また、着物における「モダン」化を、着物の柄や色、素材などの変化だけにとどまらず、「モダン」化する着物をいかに着用するか、「モダン」化する着物を着用する身体はどうあるべきか、という、着用者の心性や身体観をも考察の対象とする。同時に、それら着物の「モダン」の流行を牽引した百貨店が、どのようにマーケティングを行っていたのか、供給者側の狙いも合わせて考察する。

*1) kleosavas@gmail.com

2. 平成 23 度の調査結果

2-1. 大正・昭和期の資料に見る着物のモダンな着装法・作法の事例発掘

本共同研究では、モダン着物及びその着用者を評価し査定する視点の言説よりも、着用者に寄り添い、訴えかける要素の強かった美容指南書・マナー本などを調査し、着用者の心性・身体観の変容・刷新のポイントを探る。美容指南書・マナー本は主に婦人雑誌の付録を用いる。本誌(主に月刊誌)から独立した雑誌付録はワンテーマ・マガジンとして捉えることができると考えている。

23 年度には、主に 1930 年代の『主婦之友』『婦人倶楽部』『婦人界』『婦女界』の付録の収集・調査にあたった。「着装(着付け)」、「美容(化粧・整髪)」、「行動(振る舞い)」などのポイントから、「モダン」さがどのように示されているかをピックアップした。ここでは簡単に 3 点のみ例にあげたい。例えば、「着装(着付け)」では、雑誌『主婦之友』付録では、女優の水谷八重子は、訪問着の着付けの支度として、「ストッキングと足袋をはいて、それからガーゼの肌着」をつけるのだと読者に伝える[1]。ストッキングは洋装だけでなく、脚部の露出が少ない和装にも用いられていた。また、「着装(着付け)」と「美容(化粧・整髪)」の二つのポイントにまたがる事象には、髪と衣紋の抜きを和洋で違えるよう指摘するものがある。「洋髪の場合には、すつきりとした感じに見せるために、衣紋は細く三角に抜き」、「日本髪の場合には、どこまでも優しい感じを出す為に、衣紋も丸みを持たせて」抜くとよいというアドバイスである[2]。洋髪はもはや和装と組み合わせるスタイルとして定着し、互いにその美を引き立て合うよう、工夫されていることがわかる。一方、「行動(振る舞い)」では、和装着用時のマナーとして「^{またごもり}股洋傘」は「みつともない」と注意喚起されている[3]。乗り物で和装の女性が、膝と膝の間に傘を挟んで座っているイラストが添えられている。洋装で膝が自由になる際のマナーではなく、和装時で描かれているのが興味深い。誌面で「みつともない」と注意されねばならないほど、このような女性が実際に存在したとも考えられる。これは単にマナーの問題だけでなく、女性たちが洋装と和装のどちらも着用する身体であったことにも関連があろう。服飾小物や化粧などを和洋で横断するのみでなく、彼女たち自身が和洋の装いをまとう身体そのものであり、自由に横断する行為体でもあったのだ。

2-2. 三越の PR 誌『三越』に見られるモダン着物

20 世紀初頭、ファッションにおけるアール・ヌーヴォーの流行を牽引した三越は、モダン着物の流行の発信源の一つとして看過できない存在である。専属デザイナーを擁した三越が発表する、新しくモダンなデザインは、同社の PR 誌『三越』にも数多く見受けられる。23 年度は、文化学園大学図書館および日本近代文学館で 1908 年、1909 年の『みつこしタイムス』、1915 年～1937 年の『三越』、1931 年、1932 年の『大阪の三越』について現存する号を全て調査した。それによって、三越が打ち出した「モダン」な着物がどのようなものであったのか、その流行がもっとも顕著に見られるのはいつ頃か、どのような購買層が念頭に置かれていたのかを明らかにした。

1900 年代終わりから 1930 年代を通じて、着物の着装においても、西洋風のスタイルを図柄や生地、小物に取り入れていたことは明らかである。その対象年齢は、たいてい二十歳前後の若い令嬢または、二十四、五歳くらいまでである。それは、例えば「女学校浴衣」という、それぞれの女学校の校章と思われる花をアール・ヌーボー調にアレンジした柄の浴衣を販売していることからわかる[4]。また、比較的上流

の家庭の娘にも受け入れられていたようである。

西洋の影響を受けた図柄の変容は、1900年代の終わり、つまり明治の終わり頃の時点でも穏やかに見られるが、1925年前後になるともっとも顕著となる。今回調査したものは1908年からであるが、明治維新と同時におそらく西洋の影響は入ってきていたものと思われる。しかし、ここではその起源を探るのではなく、モダン、すなわち西洋の影響が着物の着装にどのような影響を与えたのかを探るべく、もっとも顕著に見られた1920年代半ばに焦点を当てて今後も調査を進めたい。

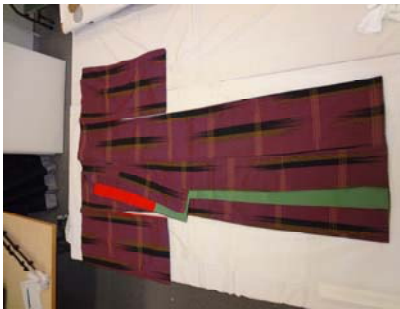


また、『三越』では、該当時期の表紙に、モダン柄の着物を着た女性の絵をしばしば用いており、それらはアール・ヌーボー、アール・デコ文化の牽引者の一人である杉浦非水によるものである(1913年10月号、1914年4月号、1914年5月号、1914年11月号、1915年1月号など)。彼の手になる表紙は話題を呼び、三越による、モダン着物を着る女性のイメージ作りに寄与したと考えられる。さらに、三越では1927年に日本初のファッションショーを行っており、一般から募集した着物図案を製品化したものを女優に着せて見せるという趣向であった。このように単に商品を販売するだけでなく、イメージ戦略を有効に用いたことは、三越の大きな特徴の一つであり、モダン着物の流行を考える上で重要な意味をもつと考えられる。


3月には、三越資料室の協力を得て、該当時期の図案集調査を予定している。同時に、ポスターなどの広告資料にも目配りし、三越がどのようにモダン着物をプロモーションし、流行の展開に寄与したのかを明らかにしたい。

2-3. 文化学園服飾博物館所蔵のモダン着物現物調査

23年度は、服飾博物館内のデータベース調査を行い、その中から13点のモダン着物の画像を得た。さらにその中で、状態によって特別観覧が可能とされた7点について現物調査を行い、その結果を以下の表にまとめた。なお、高島屋資料館および松坂屋美術館にも調査依頼を出したが、いずれもモダン着物の現物は所蔵していないとのことだった。

表1 文化学園服飾博物館収蔵品 または Table 1 Collection from the Bunka Gakuen Costume Museum

1			
<p>①カテゴリー:長着②仕立て:袷③年代:大正④素材:絹⑤色:紫(表地)、紅絹・うぐいす(裏地)⑥柄:織、黒・橙・黄のライン⑦寸法:150cm(丈)、61.5cm(衿)、62.0cm(袖丈)⑧対象年齢:娘⑨状態:良、やや日焼け⑩その他:腰当なし、普段着</p>			

<p>2</p>			
<p>①長着②単衣③20 世紀前半④麻? ⑤薄鼠、紫⑥矢絰(プリント)⑦141.8cm(丈)、61.5cm(衿)、45cm(袖丈)⑧娘⑨全体的に良⑩元禄袖、腰当なし、銘仙風のにじんだ矢絰模様がプリント技術で再現されている、近代を体現するかのような単衣である</p>			
<p>3</p>			
<p>①長着②袷③大正～昭和初期④銘仙(表地)、木綿(裏地)⑤群青・淡黄・淡橙(表地)、生成・浅黄(裏地)⑥縞柄のダイヤ⑦141cm(丈)、61.4cm(衿)、63.6cm(袖丈)⑧娘⑨良⑩腰当なし</p>			
<p>4</p>			
<p>①長着②袷③昭和初期④銘仙(表地)、木綿(裏地)⑤こげ茶・薄茶・薄桃(表地)、生成・青(裏地)⑥縦縞、絰模様⑦140.7cm(丈)、60cm(衿)、63.7cm(袖丈)⑧娘⑨良⑩腰当なし、普段着</p>			

<p>5</p>			
<p>①長着②袷③昭和初期④銘仙(表地)、絹(裏地)⑤からし・黄緑・黒・青緑・濃ローズ・ローズ(表地)、濃ローズ・桜(裏地)⑥牡丹?⑦146.7cm(丈)、61.5cm(衿)、49.7cm(袖丈)⑧娘⑨良⑩袖に丸みあり、腰当なし、普段着</p>			
<p>6</p>			
<p>①長着②袷③昭和初期④銘仙(表地)、紅絹・絹(裏地)⑤くすんだ赤・青・黄・白(表地)、淡橙(裏地)⑥藤⑦146.5cm(丈)、62.3cm(衿)、47.7cm(袖丈)⑧娘⑨良⑩腰当なし、普段着</p>			
<p>7</p>			
<p>①長着②単衣③昭和初期④銘仙、白絹(当て布)⑤淡ローズ、ローズ、すみれ、黄⑥百合?小花⑦150.3cm(丈)、64cm(衿)、75.6cm(袖丈)⑧娘⑨良⑩袖に丸み、腰当あり、奥行きのある柄にグラフィックプリントの影響が感じられる</p>			

文献

- [1]「令嬢の訪問着の着付け」『美容と作法の写真画報』、『主婦之友』1月号付録, p.118(1930)
- [2]「美人になる着付法」『美人になるには』『婦人倶楽部』5月号付録, p.72(1933)
- [3]「みつともないから止めませう」『新時代婦人心得 知らねば恥大画帖』、『婦人倶楽部』1月号付録, p.22(1932)
- [4]「流行中形浴衣 今年の新しい傾向」『三越』6月号, (1931)